

外 欄 楽 娛

渡世賞に合わせて
文学づけば

「ケタ落ちの現金黙々年の暮」というのは渡世賞当選作品。「年の暮、年始にかけて穴籠り」は番外作品。いずれにしても、私運の都合に関係なく連休となる年末年始。この期間に年んらかの遊び・娯楽を提供してこそ娯楽欄担当者の面目があるのだが、いかんせん、無知無能の輩、ヒラメキのなさは度し難いものがあります。

マ、マ、いつもの通り、御勘弁願いました、今号が渡世文芸賞発表号でありますので、こちら一つ文芸つき、書物をして穴籠りのウサを晴らさんつもり。いかにして、いかなる本を入手するか、まずはおなじみシノヤンの「釜ヶ崎チョンの間ノゾキ・釜の古本屋をめくりめぐり行く」を御笑覧あれ。

店の開くのは夕方五時頃からというので、仕方なく出直すことにした。そしてふたたびヤジキタ道中とあいなつたのであります。

私の印象に残ったことに限ってちょっとだけいうと、ドヤに戻っても（仕事から帰ってくるのが六時前後だとすると）一〇時頃までは起きています。一人でボケーッとしてるわけにもいかないし、年末ま近いこのごろでは、外で散歩するのも寒すぎてウンザリする。となれば、いっちゃんシバレンの眠狂四郎でも読破しようとなるのは必然（とはいっても、ジツは私はシバレンを読んだことがない。どうも時代劇はスカン！）。ある古本屋では、シバレンがどうのダレソレの小説はどのとすごく詳しいのがいて、横溝の推理小説がはやっとなるそうなど、コチとらにはよくわからなかったのであるが、そうとう本を読みつけているらしく、「新刊はないか？ たいいてい読んだのばかりやさかいなあ」と店の主人としゃべっていた。最近、時代物の新刊が古本屋にはいりにくくなってきたようだ。

例によって私は、マンガばかり探していた。とにかく好きなのである。黒鉄ヒロシなんて最高のギャグマンガだと思ふし、コイツはひょっとしたらバカじゃなくて、テ、テ、天才ではないか、なんて一人でオドロイている。

釜の古本屋を

めぐりめぐり行く

藤田 修

二時頃に飛田あたりからぶらぶらとはいり込んだが、いざ探してみるとなかなかわからない。ようやく釜生協の向い側の辻の奥に一軒見つけて店番のオバチャンに「貸本はありませんか？」とたずねると「ええ、ウチは古本売ってるんで。ただし、読んですぐにもってきてもろたら、ひきとりまっさかいな」という返事。なるほどと、それだけ聞いて他の本屋を探してみた。なぜなる程なのかは夜になってわかったことだが、六・七年前には貸本屋があったそう。ところが、借り手の移動がはげしい上にいちいちひかえるのも邪魔くさい。おまけに戻ってこないことがよくあるとなってくれば、一旦古本として売って、返す代わりに、二・三日くらいひきとる。その方が簡単だし、もらえれば約半額くらいでひきとる。その方が簡単だし、回転も良い。そこで自然とそうなっていくたのさ。さて他の古本屋を探してみたが、どこも閉店が多い。

真崎守のマンガはあいにく見あたらなかったが、週刊誌だけはどこの古本屋にもあって、ちょっと古いのはたいいてい一〇円だ。新品に近いのだと三〇円くらいで、一〇冊買っても三百円。ただ週刊誌はヒマツブシにはなっても、後に残らないだろうから、悪いアタマがますますボケーッとしてしまう。そこへいくと、単行本で好みのヤツを二、三冊買い込めば、じっくり時間をかけて読みごたえがある。話題にもなろうというもの。

「囲碁入門」なんてのもひとつの手ではないだろうか。全然知らん人でも、じっくり読んで研究して、ひとつ誰ぞを相手に白黒争ってみるのも風流ではないか。一局勝負するのに三〇分以上はラクにかけられるし、使ってみればアタマはさえるかも知れない。局後の研究も忘れずに、ここはこうとか、あそこではこういう手もあったとか、相手がいれば、もひとつ楽しい。ゴのハナシはこれくらいでやめ。

とにかくたとえはハナシをいったままで、トランプ占いや、屋占いで、本を一冊買ってみて、一つ自分のシユミを増やしてみようだろうか？ という提案でありました。ヘタの横ずき、カエルのシヨンペン！ なんやわからん！ いっぺん勝負しまひよか？ 囲碁がダメなら将棋があるさ、将棋がダメなら麻雀があるさ！

シノヤンが柴練嫌いとはついぞ知りませんでした。私は大の眠狂四郎ファン、もう読み始めると止まらな。一時になろうが二時になろうが、ともかく読み終るまではなんとなく落ち着かなくて、翌日に仕事に出るなんぞは眼中になし。昨日「眠狂四郎殺法帖」を読んでしまったので、最早狂四郎シリーズで読んでないのはなくなってしまう。全くもったいない……。

それはともかくとして、読むだけでなく、もっと爽のある話を少し。

本を読めばヒマが楽しくツブせるが、一度読み終わった本は置いておきましょう。それをどうするかというと、また本屋へ持って行く。そうすれば買った時の半値ぐらいは戻ってくる。

三日も四日もヒマが出来るとなると、読める本も、マ、本の内容、読み進むスピードで色々あろうが、かなりの冊数になる。柴練のものとなると、高価で一冊五百円以

上はする。で、狂四郎シリーズを全部読もうとすると、「独歩行」「無情」「百話」等々で、十二〜三冊はあるから、三千円から五千円ぐらいの投資となる。それを正月の三日までに読んで古本屋へ持って行けば、最低千五百円から二千五百円〜キレイに読めば、もう少し高く引き取ってくれるかも知れない。戻ってくるという寸法だ。

と、なってくると、読みたい本があって、戻りの多い本屋はどこか、ということになってくるが、六〜七軒ある古本・貸本屋、どれも一長一短でココ、という店がない。一番品揃えがいいのはシノヤンの紹介している古本屋で、屋号は聞き忘れたが、本の後に貼り付けてある紙に「辰」 という判が押してあるので、仮りに辰屋としておこう。

この店、以前は南職安の前に店を出していたが、今は建て替え中で、沖繩屋の筋向い、路地の奥で営業している。国語辞典から週刊誌まで、誰が行っても好みの本が一冊はありそう。

値段は二つ書かれていて、上の方が売値、下の方が引き取り値段となっている。引き取り値は大体売り値の半分よりやや多目になっているが、四、五日以上を経過するともう少し安くでしか引き取らないようだ。もっとも

この親父さん、気がすこぶる良さそうで、客と話をしているのを聞くともなく聞いていると、いや、中にはひどいものもある。うちの店から黙って本を持って居って、それを売りにくる。しかも本人が堂々とくるんやから大したもんや。もっとも、それを黙って買うこっちはちやけどな……ハッハッハッハッなんて気持ち良さそうに話している。

辰屋の近く、萩之茶屋商店街にあるのが全集堂。最近主人が変ったせい、前は客がよく入っていたのに比べるところや客足が落ちていようだ。本棚にもあいてるところがあつて、時代物が入りすぎて困る、と親父さんがこぼしていた。ここは貸本式でやっていて、私が買った「眠狂四郎殺法帖」を例にとると、これは前・後二冊で五百円、三日以内に返しに行くと一日五〇円の二冊で百円を引いて、残り四百円を返してくれる。三日目以後は一日につき五円取られる。

釜ヶ崎銀座を北上して行って、右手にあるのが源九郎書店。ここでは店頭で競馬新聞なんか売ってる。入った左手が貸本で、右手が売り本。貸本の部で高いのがやはり柴練で一冊七百〜八百円の保証金、他は二五〇円から四百円ぐらい。翌日に返しに行けば、保証金の二割ぐらいを取って残りを返してくれる。三日目以後は一日十円

取られる。

そこからずうっと足を伸ばして、山王町は公南荘から飛田に向って歩いて行くと左手にあるのが旧・とびた書店。六〜七年前は貸本専門でやっていたそうだが、今は古本屋として営業。大体一冊一八〇円から二五〇円までの値段で、二、三日中に返しに行くと半額で引き取ってくれる。

まだ古本屋は二〜三軒あるが、マア、似たりよったりだろう。

ともかく、辰屋が良い。いわゆる文学小説から気散じのエロ雑誌まで幅広く、その時の気分によって選びやすい。

本をしたま買い込んで、一人鼻毛でも抜きながら、痛快な主人公の活劇に胸おどらせて、世間が動き始めてから換金、精をつけて仕事に出れば、今年もなんとか過せるかなあ、という気に、なれるかどうかは保証の限りではないが、一晩か二晩で持ち金を酒に流すよりかは、いくらかマシなヒマツブシではありますまいか。

もっとも、本と酒をハカリにかけりゃ、酒が重たい大根月夜、というのも、新聞紙を上着の下にシコタマ巻く、ぐらいの注意を最低すれば、マ、マ、巴れのなすこと、結構なことでありましょう。